

長崎東高校ベラルーシ共和国派遣団の報告会

日本・ベラルーシ友好派遣団 2019 の一員として、7月24日（水）～8月4日（日）の12日間にわたり長崎東高等学校の5名の生徒がベラルーシ共和国に派遣されました。これを受けて、10月7日（月）派遣された生徒5名と関係者が教育庁を訪れ、活動の報告を行いました。

報告会の様子



☆参加された生徒の皆さんの報告から（一部）☆

○最初の7日間は、自然豊かな「ズプリヨノク」というキャンプ場で過ごしました。ともに滞在した現地の子どもたちに日本文化を紹介したり、お互いの趣味について話したり、英語でコミュニケーションを深めることができました。

○「ズプリヨノク」では、第1言語が異なる様々な国の子どもたちと過ごしました。互いに話す言語が違うので、上手に話すことよりも、伝えようとするのが大切なのだと、改めて感じました。

○首都ミンスクでは、世界的にも有名なゲーム会社を訪問しました。チーフ担当者の方が話された「これからは、世界が情報を通じてつながる時代だ。幅広いことに興味をもって、世界中の人たちと協力することが大事だ。」という言葉が、私の心に強く響きました。

○ミンスクの中心部には、長崎から送られた浦上天主堂の鐘のレプリカがありました。毎週日曜日の夜に、長崎、広島、そしてチェルノブイリ原発事故で亡くなった方々を追悼するために鐘を鳴らすのだそうです。長崎とベラルーシのつながりを感じることができ、とても感動しました。

○ベラルーシの教育庁を訪問し、教育大臣と対談しました。大臣からの質問に自分の意見を回答することができ、今後の自分の自信につながりました。

○ベラルーシの文化にふれ、現地の方々と交流できたことが心に残りました。古代文化センターでは、民族衣装を着た現地の生徒たちが、私たちを温かく迎えてくれました。ベラルーシの文化や伝統を知ることにより、その魅力に惹かれていきました。このような文化がどのように形成されてきたのか、もっと深く知りたいと思いました。将来は、新たな文化や伝統に日々ふれることのできるような職業に就きたいです。

教育長あいさつ（概要）



日本・ベラルーシ友好派遣団 2019 に参加された長崎東高校の皆さん、12日間にわたる研修、お疲れ様でした。参加された生徒の皆さん方の活動状況の映像と発表から、皆さん方が大変充実した研修をしてこられたことが、よく分かりました。多くの研修の中で、ベラルーシの方々や日本から参加した他県の高校生と接して、いろいろな考え方や文化の違いを身をもって感じられたことは、非常に有意義であったと思います。

ベラルーシもちろんですが、各国にはその国独自の文化があり、その文化の中で育ってきた高校生はその文化の中で築き上げられた考えをもっています。もちろん、長崎で育った皆さんは、日本文化の中での日本人としての考えをもっています。同じ人間として、高校生として、発想や考えは違うかもしれませんが、違いがあっても当然であるわけですから、実際に話をしたり、ダンスをしたりすることを通して、その違いがはっきりと分かったという経験が大変良かったのではないのでしょうか。

これからは、ますますグローバルな社会となっていきます。国際科に在籍する皆さん方は、語学を含めていろいろな勉強をしていると思いますが、「各国の文化は違う」というスタートラインに立ち、その上で相手の話をしっかり聞き、自分の意見を表現することが、真の友好につながっていきます。そのような意味においても、今回は非常によい経験であったと思います。世界のいろいろな問題に関心をもって、これからも勉強を含め、高校生活を送っていただきたいと願っています。

今回、素晴らしい体験ができたことは、皆さんの努力の成果であるとともに、指導に携わってこられた先生方や本プログラムの主催者の方々、ベラルーシ共和国大使様など、多くの皆様方のご支援の賜物であると思います。関係の皆様のご協力とご支援に感謝申し上げます。参加された生徒の皆さん、本当にお疲れ様でした。



生徒の皆さんの活動状況を拝見し、参加者一人一人からの活動報告を伺う中で、12日間という期間でありながら、生徒の皆さんの成長ぶりが見られ、頼もしく感じました。この貴重な経験を財産として、地元長崎県はもとより、日本を牽引していく将来の国際リーダーとして活躍されることを期待いたします。

令和元年10月9日
長崎県教育委員会
教育長 池松 誠二